

[社 会]

社会的事象と自分をつなぎ、問題解決を通して多角的に 自分の考えを再構成する児童の育成

— 小学校第5学年「工業生産を支える人々～工業の今と未来～」を通して —

長橋 俊文*

1 はじめに

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編の第5学年目標において、「社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、我が国の国土に対する愛情、我が国の産業の発展を願い我が国の将来を担う国民としての自覚を養う」とある¹⁾。また、無藤隆（2017）は、次期学習指導要領等が果たす役割の一つとして、「これからの予想のつかない社会において、社会を創り出していく子どもたちが社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために、その覚悟と希望と力量を小さい時期から養わねばならない」、そして、「将来に向けて主体的に自らの可能性を実現しようとする希望と社会をよくしていくことに貢献しようとする志を幼い時期から引き出し、育むことにより、未知の状況でたくましく、やりがいをもって生きていく在り方が実現できる」としている²⁾。

しかし、私の担任した学級においては大きな課題があった。授業の振り返りに「はじめて知ってよかった」と知識の習得に終わったり「Aさんはすごいと思った」など、他人事で終わったりしている記述が見られた。これでは、社会的事象を自分のことと捉えることができていないため、主体的な学習態度は望めず、自分の立場だけでなく、いろいろな人の立場に立って考える多角的な思考や時間軸が未来に向かう児童自身の将来を見据えた学習には至っていないといえなかった。

澤井陽介（2017）は、教師の役割をつなぎ役とし、児童の発言と発言をつないだり、情報と情報をつないだり、児童のつかんだ事実を材料にして何を感じ考えたのかという思考をつないだりすることだとしている。そして、「実は社会の中の事実なのだ」、「社会とは人のつながりで、この具体は社会の中の出来事なのだ」と、つなぐことを示している³⁾。

そこで、児童が社会的事象を自分事として捉え、問題解決に向けて、友達の発言や必要だと考えられる情報をつなぎながら児童自身の将来に向けて多角的に問題解決する能力の育成に向けた有効な手立てを検証する。

2 研究の目的と方法

本研究の目的は、社会的事象を児童自身が「自分の問題」、「自分たちの問題」として捉え、問題解決に向けて自分の立場に限らず、いろいろな人の立場に立ち、友達の発言や必要な情報を基に多角的に考え、自分たちの将来についてよりよい考えを育成することを目的とする。

そのために、次の三つの手立てを講じ、その有効性を検証する。

(1) 社会的事象と児童をつなぐ場の設定

社会的事象を児童が「どこか遠くで起こっていること」、「自分とは関係のないAさんのこと」と捉えていては、児童にとって自分事ではなく、教科書の中での出来事にすぎない。これでは、主体的な学びは期待できない。そこで、社会的事象と児童をつなぐために実物を見たり、実際に専門的な話を聞いたりすることで、資料だけでは伝わらない思いや願いに触れ、「Aさんの立場に立って考え、なんとか（学習問題を）解決したい」、「自分たちの問題だから自分たちで解決しなければ」と単元を通して社会的事象を自分事として関わろうとする姿を目指す。

(2) 根拠を基に対立軸のある学習問題について話し合う場の設定

社会的事象をいろいろな人の立場に立って多角的に捉えるためには、まず、自分の考えをもつことが必要となる。自分の考えをもつに当たり、根拠が曖昧だと話し合いでの自分の立場が曖昧になり自分の考えと友達の考えを比較しても、どこが違い、どこが似ているのか分からなくなる。そこで、自分の考えを構築する上で、根拠となる共通の資料や体験を基に客観的に自分の考えを構築し、自分の立場をはっきりさせてから学習問題を解決するための話し合いに向かうことで「友達は、この資料から、なぜ、自分と違う捉え方をしたのか知りたい」、「自分と同じ考えなのに、なぜ根拠となる

*長岡市立富曾亀小学校

資料が違うのか確かめたい」と根拠を基に相手の立場に立って多角的に話し合う姿を目指す。

(3) 自分の考えを再構成する場の設定

共通の資料や体験を基に話し合いをし、友達の考えを踏まえることで自分の考えを構成するだけでは、本単元の実践にとどまり持続可能な考え方を身に付けたとはいえない。そこで、自分の考えを再構成することで、「資料や見学先で聞いたことを基に自分の考えをつくることで、自分勝手な考えではなくなった」、「話し合いを通して、自分以外の人の立場で考えることで自分では思い付かないことを考えるようになった」というような自分の考えの変容に気づき、客観性・妥当性や多面性をもたせることの有効性を認識する姿を目指す。

3 授業の実際

(1) 単元名 「工業生産を支える人々～工業の今と未来～」

(2) 単元の目標

我が国の工業地域の分布や工業生産の種類などを地図資料や統計資料を活用しながら調べることを通して、我が国の工業生産の特色や課題について話し合い、国民生活を支える日本の工業の役割について考えるようにする。

(3) 単元の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
国民生活を支えている工業の主な地域や日本の工業の特色、課題について分かっている。	日本の工業の特色や課題について問いや予想、調べる計画などを考えとともに、日本の工業の特色や課題について国民生活と関連付けて考え、工業生産が国民生活を支えていることを根拠をもって表現している。	日本の工業地域の分布や特色に関心をもち、意欲的に調べている。 国民生活を支える我が国の工業生産の理解を深めようとしている。

(4) 単元の指導計画（全10時間）

次(時数)	学習内容	学習活動	主な評価規準と方法
1 (1)	・日本の工業生産にはどのような特色があり、これからどのように進めていけばよいのか、学習課題を設定する。	・日本の工業製品では、どのような製品が多く作られているのか調べる。	日本の工業ではどのような製品が作られているか調べたいという意欲をもつ。【ノート】
2 (2)	・工業のさかんな地域は、どのようなところに多いか調べる。	・工業のさかんな地域の理由を、土地の条件や交通網の発達と関係付けながら考える。	工業のさかんな地域の理由を、土地の条件や交通網の発達と関係付けたり、大工場と中小工場の特色をつかんだりしている。【シート・ノート】
(3)	・大工場と中小工場、それぞれの特色をつかむ。	・大工場と中小工場の生産額や生産額に占める割合を調べる。	
3 (4)	・長岡市のものづくりについて知ることで、その特色をつかむ。	・長岡市のものづくりの様子を調べ、工夫や努力について知る。	長岡市のものづくりの工夫や努力を自分の言葉で記述している。【シート】
(5・6)	・N歯車製作所の見学を通して、歯車の製造過程を知る。	・N歯車製作所の見学をすることで歯車の製造過程を調べる。	見学で見たり聞いたりしたことをまとめている。【シート・ノート】
(7)	・N歯車製作所は、歯車を製作・販売する上で、どのような工夫や努力をしているのか気付く。	・N歯車製作所は、歯車を製作・販売する上で、どのような工夫や努力をしているのか整理する。	N歯車製作所の工夫や努力を自分の言葉でまとめている。【シート】
(8)	・大工場と中小工場を比べることで大・中小工場の果たす役割について考える。	・もし、働くなら大工場と中小工場のどちらで働くかについて資料を基に考える。	大・中小工場の果たす役割について自分の考えを捉え直し、現在の日本の工業生産の課題から将来の工業生産の在り方を提言している。【シート】
(9)	・工業生産は、自分たちの暮らしをさまざまな面で豊かにしていて、自分たちの生活と結びついていることを知る。	・工業生産が人々の生活に果たす役割や意味について話し合い、これからの工業生産の在り方について考えをまとめる。	工業生産と人々の生活に関連付けながら、工業生産が国民生活に果たす役割や今後目指していく工業生産の在り方について考え、表現している。【ノート】
4 (10)	・これまでの学習を振り返りながら、これからの工業生産に必要な考え方をまとめる。	・これからの工業生産には、どのような考え方が求められているかについてまとめる。	これからの日本の工業生産に必要な考え方をまとめている。【シート】

(5) 手立ての実際

【手立て(1) 社会的象と児童をつなぐ場の設定】

第3次 5・6時間目 N歯車製作所の見学を通して、歯車の製造過程を知る。

5・6時間目の見学では、その歯車製作所の歯車は「どのような技術が日本トップクラスなのか」、「なぜトップクラスなのか」、その理由を見付けてくることを目的にした。目的の背景として「わたしたちのまち長岡は工業がさかんだ」ということを実感するきっかけにしたいということと、長岡市の工業がさかんでないと考える児童も「日本トップの技術なら見てみたい」ということがあった。また、児童と長岡市の工業がさかんだということをつなぎ、学級の全員が日本トップクラスの歯車製作所の技術の理由を知りたいと思ったためである。また、N歯車製作所を見学先に選んだ理由は、学級児童の家庭の半数以上が購読している新聞で、技術の高さから表彰を受けたことが記事になっていたことや全国放送で取り上げられたこと、教科書における本単元でも中小工場を取り上げる例として歯車を取り上げられていることがN歯車製作所を見学先として選んだ理由である。

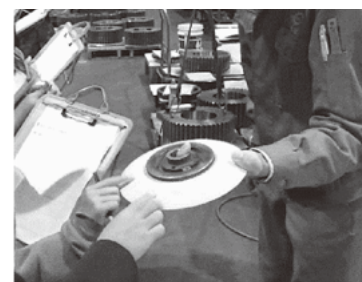


写真1 見学で実物に触れる

見学では、日本トップレベルの歯車を作る技術の高さにつながりそうな努力や工夫を児童一人一人の視点で探した。以下の会話は見学の中で行われたN歯車製作所の方の説明と児童とのやり取りである。

見学でN歯車製作所の方とのやり取りの中で社会的象（歯車製作の技術が日本トップ）と児童をつないだ場面

- A：さっきの話のなかで「毎月1000種類の歯車を3000個作っていて、1種類の歯車を1個しか作らないこともある。作った歯車は主に関東に出荷している。」とおっしゃっていましたが、なぜそんなに多くの種類の歯車を少しずつしか作らないのですか。
- ☑：いい質問ですね。お客さんが作ってほしい歯車の形はいろいろで、たくさんの種類があるからです。
- B：儲かりますか。
- ☑：どうでしょう。ただ、それだけ多くの種類の歯車を作ることができるということは、それだけ技術が必要だということです。少しの種類を大量生産しても、大工場にはかなわないし、会社が生き残っていくための作戦として、多くの種類の歯車を作るという多品種少量生産という方針をとっています。
- B：そっか。たくさん作っても売れなきゃ意味がないのか。お客さんがほしい歯車を作れるってすごいことなんだ。
- C：（独り言のように）長岡の歯車を関東の人が注文するっていうのも技術が高い証拠じゃん。

歯車製作において、日本トップクラスの技術について児童自身の「知りたい」という目的意識が歯車製作所の方とのやり取りによる思考の広がりを生み、歯車製作所の方の子どもの立場に立って言葉を選び説明しようとする姿勢が、質問した児童に限らず、周りの友達とN歯車製作所の方のやり取りを聞き取り、聞き逃さないようにメモしようとする児童の姿を生んだと考えられる。

見学後の振り返りでC児は、「一つ一つよりよい歯車を作るために、ていねいに作業したり、お客さんの注文を聞いて、一種類の歯車を一個しか作らなかつたりするのは、お客様に喜んでほしいと工場の人は思っているからだと私は考えます」とN歯車製作所の人と自分をつなぎ、N歯車製作所の方の立場に立って考える姿が見られるようになった。この記述は、C児のもので、見学の際にN歯車製作所の方に直接質問した児童ではない。A児・B児の質問が、N歯車製作所の方の思いとC児をつないだ場面でもあったといえる。また、C児の「長岡の歯車を関東の人が注文するっていうのも技術が高い証拠」という発言は、児童自身と長岡市の工業はさかんであるということをつないだ姿だと考える。

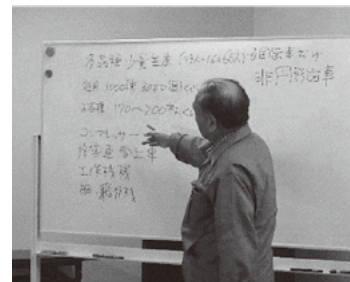


写真2 N製作所の方の説明

7時間目の振り返りで「本当にいっぱい歯車のことがよく分かりました。ありがとうございます」と、「歯車のことについて知ったことを家の人に自慢したいと思います」という記述があり、N歯車製作所の方の思いや願いが児童に伝わりつながった姿だと考えられる。この記述は、映像や資料から獲得した情報をまとめただけでは出てこない言葉である。見学によって実物を見たり、製作所の方に専門的な話を聞いたりすることで、資料の読み取りだけではつなぐことのできない、児童とN歯車製作所の方との一方通行ではない双方向のコミュニケーションによって、児童は児童自身と長岡市は工業がさかんであることをつないだ姿だと考える。

【手立て(2) 根拠を基に対立軸のある学習問題について話し合う場の設定】

第3次 8時間目 大工場と中小工場を比べることで大・中小工場の果たす役割について考える。

これまでの学習を基に、これからの日本の工業の在り方について考えるために中小工場と大工場を比較し、それぞれ

が日本の工業において果たす役割を考えた。

最初の発問を「なぜ、働くのか」とした。児童は、「生きるため」、「生活するため」、「お金を稼ぐため」と発言した。この発問の意図は、学習問題を作るに当たって経済的視点に偏った価値判断にばかり捉われることを避けるためである。

次に、「将来、どのように働きたいか」と問い、「将来、自分が中小工場と大工場で働くならどちらか」を対立軸とし、学習問題を作った。中小工場はN歯車製作所、大工場はH社自動車工場を例示した。N歯車製作所と大工場H社自動車工場を例示したのは、本単元でそれぞれについて学習してきたためである。

中小工場と大工場を対比的に紹介する映像資料視聴後、働く様子の分かる中小工場と大工場の写真を対比的に提示した。「中小工場は人が作業をしている」、「中小工場は人が機械を操作している」と、中小工場は人が工業製品の製作に大きく関わっていることを読み取った。一方、「大工場はロボットが作業をしている」と、大工場は人が工業製品の製作作業に直接関わっていないことを読み取った。そして、「従業員の数」「作っている製品」の視点から、中小工場と大工場のどちらで働きたいか問うた。学級全員がシートに中小工場と大工場で作働ならどちらかを選び、その理由を書いた後、全体で話し合いをした。この時点で中小工場を選んだ児童26名、大工場を選んだ児童7名であった。

「働く人数」に焦点を当てて対立軸のある学習問題について考えを広げる場面
<p>㊦：中小工場と大工場のどちらで働きたいか、みんなの考えを聞かせてください。中小工場と大工場で作働している人の数に違いがありますが、どうですか。</p> <p>D：人数でいったら、人が多い大工場がいいと思う。大工場で、みんなと協力して重機や貨物船など、大きなものを造ると、誰かの役に立っているという達成感がある。</p> <p>E：中小工場の方が協力という面では、人数が少ないから仲間のことをよく知ることができるし、よりよいものを作るためにいろいろ相談ができそう。</p> <p>F：あと、中小工場は、製品を作ることに人が直接関わるから、高い技術が必要だし、責任が重い気がする。だから自分は、逆に中小工場の方が達成感がある気がする。</p> <p>D：確かに、EさんとFさんのいうように人数が少ないから、仲がよくなって、いろいろなことが相談できるから技術も高くなるのかも。働く人の数だけで決めるのはちょっと難しいな。</p>
「製品」に焦点を当てて対立軸のある学習問題について考えを広げる場面
<p>㊦：それでは、それぞれの工場で作働している製品についてはどうですか。</p> <p>G：靴など、自分たちの生活に身近な物を作働しているから、中小工場で作働の方がやりがいがある。</p> <p>H：大工場は、世界で活躍している自動車などを造働しているから、製品でいったら大工場の方がやりがいがあるんじゃない。</p> <p>I：でも、大工場で組み立てる部品は中小工場で作働しているんだよね。</p> <p>J：確かに大工場は中小工場のおかげで製品を造働することができるんだよね。</p> <p>K：それぞれの立場で考えるとどっちも（中小工場・大工場）必要なんだよね…。</p>

児童のなかから実際に働働している人の声が聞きたいという声が上がったので、以下の資料を提示した。

（中小工場で作働く人の声）歯車の歯の表面を磁石で研削する「歯車研削」を行っています。難しいのは細かな精度に定めること。
1/10000mmの精度が要求されることもあり、さらに最終工程なので失敗したら後がありません。プレッシャーを感じることもありますが、ねらった精度にピシヤリとハマったときの気持ちよさは格別です。

出典：長岡歯車製作所HP（最終閲覧2019.10.4）

（大工場で作働く人の声）15人ほどのチームを組み、作業を分担します。一人が受けもつラインの長さは5mほどです。
取り付ける部品の数や種類が1台ごとに違うので、大変です。
自分たちが組み立てた自動車が、街を走働っているのを見掛けると嬉しくなります。

出典：有田和正他『小学社会5上』教育出版（2014.4.4検定済、2015.1.20発行）

児童は資料で気になる箇所に線を引き、線を引いた箇所について話し合った。

それぞれの工場で作働く人の声を基に考えを広げる場面
<p>㊦：どこに線を引きましたか。</p> <p>L：「1/10000mmの精度を要求される」ということはそれだけ技術があるということだよ。</p> <p>M：「取り付ける部品の数や種類が1台ごとに違う」の方が大変だよ。だっていくつもの部品を見なきゃいけないでしょ。歯車は、一つの歯車に集中する大変さがあるし、自動車は、一気にいろいろな部品を扱う大変さがあるよ。これも、ある意味技術でしょ。</p> <p>O：あと、僕は、「最終工程なのでプレッシャーはありますが、ねらった精度にピシヤリとはまった時の気持ちよさは格別です」に線を引いたんだけど、これは、気持ちの面でのやりがいってことだよ。</p>

P：気持ちの面でいうと、私は、「自分たちが組み立てた自動車が、街を走っているのを見掛けると嬉しくなる。」に線を引きました。

Q：なんか、両方のことを考えたら、結局、両方よく思えてきた。

R：最後は、「自分だったらどっちか」だよな。

終末の時点で中小工場を選んだ児童25名、大工場を選んだ児童8名であった。

中小工場・大工場を対立軸に対して、対比的に資料を提示したため、それぞれの立場に立って、考える視点を焦点化して考えることで多角的に考えられたのではないかと考える。そのため、児童のシートには「どっちのよさも分かるけれど」と前置きをしたうえで、「自分は歯車製作所のように一つのことに集中できて、さらに技術のある中小工場で働きたい」というような表現が見られた。多角的に考えた結果、「どちらかという」という中立な立場での記述が64%と多かったのではないかと考えられる。

【手立て(3) 自分の考えを再構成する場の設定】

第4次 10時間目 これまでの学習を振り返りながら、これからの工業生産に必要な考え方をまとめる。

【課題】

最近では、輸入製品との価格競争や、国内の大工場の海外移転が、中小工場の生産に影響をあたえている。規模の小さな中小工場では、技術を受け継ぐ若い働き手が不足しているところもある。

これからの日本の工業がどのようになっていくとよいか。

課題に関しての資料を全体で共有・確認する時間を取り、これまでのシートやノート、見学を基に課題についてシートに書いた後、お互いの考えを聞いた。確認した資料は、①N歯車製作所見学メモ、②本単元で記入したノートやシート、③外国にある日本の会社の数の変化、④日本の工場数、工場で働く人の数、工業生産額にしめる大工場と中小工場の割合、⑤各工業の生産額にしめる大工場と中小工場の割合、⑥大工場・中小工場の生産額にしめる各工業割合、⑦日本の工場の数の変化の6種類である。

既習事項を基に自分の考えを再構成する場面

T：これからの日本の工業は、どうなっていくとよいか、みんなの考えを聞かせてください。

S：若い働き手が不足しているから、もっと多くの若い働き手が必要だと思う。若い人が働きやすい環境があると日本の工業は発展し続けると思う。

T：それでは、どうしたら若い人が働きやすい環境になると考えますか。

U：日本の工業全体のことを考えたら中小工場は競争より協力した方がいいと思う。

T：なぜ、協力した方がよいのですか。

U：工業の中でも、日本の中小工場のいろいろな分野の工場や人が協力すると、いろいろなことに挑戦できる可能性が広がると思う。そうしたら、新しいことに若い人たちが興味をもってくれると思う。

V：確かに、日本の高い技術をもつ中小工場が協力したら、何かいいものができるかもしれないし、輸入されてきたものに勝てる気がする。

W：さっき、Sさんが「発展し続ける」ということを言ったけれど、日本の国内で外国の製品と価格競争をするだけでなく、日本の製品のよさを外国の人に知ってもらうことも日本が発展し続けるには大事だと思う。例えば、外国の人の足に合った履きやすいスニーカーとか和食ブームだから、せんべいとか。

V：競争する環境も大事だけれど、協力する環境の方が気持ち的に働きやすそうだな。

X：それと、今は、おじいちゃん・おばあちゃんが多くなっているから、やっぱり若い人が工業に興味をもつ環境をつくって、若い人が工業を継いで、私たちが未来を守らないといけない。

T：日本の大工場の外国への移転についてはどうですか。

Y：もし、自分が大工場に働くとしたら、外国の工場に働くのでもいい。学校で英語も習っているから。大工場をどこに建てるかじゃなくて、世界で活躍する工業製品を作りたい。

Z：ほくも、もっと便利なものを作りたい。技術があるなら、多品種少量生産じゃなくて、外国でも多品種をいっぱい生産すればいいと思う。

これからの日本の工業の在り方について、「もし、自分が働くなら」と、課題を自分事と捉えながら、中小工場と大工場のどちらかに偏ることなく、多面的・客観的に自分の考えを再構成して提言する記述が30名(91%)の児童に見られた。自分の考えの再構成にあたり、手元にある資料を共有し、確認する時間が有効に働いたと考える。

授業の振り返りは以下のとおりである。

(W児)

わたしは、日本の工業製品が世界で活用されて、世界中のみんながうれしくなってほしい。せんべいやスニーカーなど、世界の人たちが「おいしい」「はきやすい」という気持ちになってほしいから。

わたしの将来は、世界で活用される工業製品を作る会社で働きたい。

W児は、市場を日本国内だけでなく、外国も視野に入れている。多角的な視点をもちながら自分の考えが再構成されたと考えられる。

(X児)

未来を担う私たちのような若い人たちが興味をもてるような環境づくり。若い人たちに工業を継いでもらおう。今は、おじいちゃん、おばあちゃんが多くなってきているので、私たちが未来を守る。

日本の工業の課題をX児は自分たちの将来の問題と捉えている。そして、「私たちが未来を守る」の記述からは、覚悟とたくましさを感じ取れる。

多角的な視点を踏まえての再構成ができていたことは、多角的な視点を獲得するための「手立て(2)」を講じてから自分の考えの再構成をする場を設定したことが有効に働いたと考えられる。

4 成果と課題

(1) 成果

N歯車製作所への見学で児童は、多くの情報を得ることができた。「手立て(1) 社会的事象と児童をつなぐ場の設定」として、見学の目的を「何がトップクラスなのか」、「なぜ日本トップクラスなのか」に視点を焦点化したことが有効に働いたと考えられる。目的が明確であるため、見学では注意深く見たり、聞いたりする姿があった。N歯車製作所の方が説明する姿や内容から歯車を自分に関係のある事象として捉え、見聞きしたことをつなぎ合わせながら質問するなど、主体的に視野を広げようとする活動になった。

対立軸のある学習問題を作り、自分の立場をはっきりさせることで、自分の考えの根拠を資料に求めようとする姿があった。「中小工場と大工場のどちらで働きたいか」を学習問題にすると、「規模の大小」、「生産品の使われ方や果たす役割」、「技術力」、「達成感」に焦点を当て、自分の立場を変えながら比較し、「私だったら」と自分事として多角的に価値判断をしていた。このことから、「手立て(2) 根拠を基に対立軸のある学習問題について話し合う場の設定」が有効に働いたと考えられる。

資料を基に自分の考えをもち、さらに追加の資料や友達の考えを基に自分の考えを再構成することは、多角的な視点を獲得しながら、自分の考えを再構成していることが児童の記述から分かる。「これからの日本の工業がどのようになっていくとよいか」を考えた際、「友達の意見を聞いて資料を見直すと、違った見方ができた」など、「手立て(3) 自分の考えを再構成する場の設定」が有効に働いたと考えられる。

(2) 課題

グループで話し合いをする際、友達の考えをそのまま受け入れる姿があった。友達の考えを肯定的に聞く姿勢は大事であるが、資料の読み取りの違いや考えの違いについて、批判的な視点から建設的な考えの再構成もできるように手立てを講じていく必要がある。

引用文献

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編』日本文教出版, 2018年, p.70.
- 2) 無藤隆「新学習指導要領等が果たす役割」安野功他編『平成29年版小学校学習指導要領ポイント総整理 社会』東洋館出版社, 2017年, p.13.
- 3) 澤井陽介「新しい社会科が目指す地平「未来志向」」, 同上書, p.6.

参考文献

- ・櫻井謙一「小学校社会科における地域学習の改善に関する研究」『上越社会研究』第20号, 上越教育大学社会科教育学会, 2005年.
- ・白井克尚「問題解決学習を創出した社会科授業研究の論理と実際」『社会科教育研究』No.135, 日本社会科教育学会, 2018年.
- ・由井蘭健『一人ひとりが考え, 全員でつくる社会科授業』東洋館出版社, 2017年.